

古代ロマン息づくまち

縄文のビーナス 国宝指定30年



上

1986年9月8日、茅野市米沢埴原田の棚畑遺跡から1体の土偶が出土した。高さ27センチ、重さ2・14キログラムの立像形の大型土偶で、妊娠した女性の姿を表している。約5000年前の縄文時代中期に作られたとされ、国内の土偶の多くは破壊された状態で見つかった中、ほぼ完全な形で掘り出された。「縄文のビーナス」の愛称で呼ばれる国宝土偶だ。

頭はてつぺんが平らで、帽子をかぶっているような形状。顔は仮面をかぶっているようなハート形で、つり上がった切れ長の目、おちよぽ口など、八ヶ岳山麓の縄文中期の土偶に特有の顔立ち。胸は小さな突起状。腹

妊娠土偶の代表選手

部は膨らんで突き出し、尻は逆ハート形で大きく張り出している。妊娠の状態が表現されている。足は太く、どっしり感がある。安産祈願などを願っていると考えられている。

工業団地の造成に伴う同遺跡の発掘調査で見つかった。現在縄文のビーナスを所蔵し、展示している市尖石縄文考古館の守矢昌文特別館長(67)は当時、同館前身の市尖石考古館の学芸員として発掘調査に携わり、調査補助員と2人で縄文のビーナス

を発見した。環状集落址の中央部の広場にある穴の一つに、横たわるように埋まっていた。

守矢さんは縄文のビーナスを「中部高地または八ヶ岳山麓の

縄文時代中期の妊娠土偶の代表選手」と説明する。「縄文のビーナス」の愛称は誰が名付けたか定かではなく、「自然発生的に出てきたのかな」と守矢さん。



2019年、県立歴史館で開かれた「土偶展 国宝土偶～縄文文化の多様な個性」に展示された「縄文のビーナス」。国内をはじめ海外の展示会にも出品され、高く評価された

縄文のビーナスは89年の国の重要文化財指定を経て、茅野市関係で初めて、縄文時代の遺物として日本で第1号の国宝指定となった。守矢さんは「特異な例ではなく、ポピュラーで、妊娠土偶と言えばこれを指すという造形をしていて、誰が見ても納得できることが大事だったと思う」と話す。出土した際の状態などの出自が明確だったことや、縄文人の精神文化を伝える貴重な遺物であったことなども認められた。

尖石考古館は国宝となった縄文のビーナスを保管、保護して公開するためなどを目的に、2000年に尖石縄文考古館としてリニューアルオープン。縄文のビーナスは各地で展示され、国内にとどまらず国宝指定前の1990～91年にはニューヨーク

ク、指定後の9809年にロンドンパリの開かれたれ、海外でも高守矢さんは国う振り返る。「言れが市民権を得イデンティティパーツになった止めてくれたこつ」の成果になる

茅野市内から文のビーナス」6月15日の国宝となった。このに市内で出土の「神」が14年に国とも重なり、縄魅力の一つとしてることになった偶があるまちと信や観光面の取特色ある教育も縄文を生かしたれまでや今後を

米仏英海外でも高い評価